

ITP派遣報告書

1. 氏名

富澤 宣太郎

2. 派遣先大学名

ライデン大学(オランダ)

3. 派遣期間

2012年7月3日 ~ 2012年9月4日

4. 研究及び派遣の概要

修士論文における問題関心は日本近世の支配秩序という社会学的関心であって、その認識手段となるのは近世朱子学の展開である。朱子学は鎌倉時代に日本に伝えられ、近世直前まで禅林において外典として、また一部の公家の家学として学ばれてきた。中世禅林においては、朱子学はあくまでも仏教の補助的なものとされてきたのであるが、近世直前に儒仏一致的な朱子学理解を脱し、禅から独立・対抗して「儒学者」乃至「朱子学者」を自称する教養層が、京都に現われるに至った。この儒学者、朱子学を社会的・歴史的事象と捉え、修士論文では、この近世初頭の儒学者発生の社会的状況および社会的要因を考察する。この事象の解明のために、朝廷、公家、武家、寺家、そして町人の布置連関を視角とした社会学的考察を行う。またこの考察は、神道との融合関係、徂徠学・国学への展開など、日本儒学の個性を知識社会学的に考察する上でも有効となり得るだろう。

今回の派遣では、上記の問題関心に関わる文献調査及びライデン大学所属教授による指導を主眼として研究を行った。

ライデン大学においては、日本近世思想史を専門となさるポート教授に3回に亘る指導の機会を持つことができた。面談内容としては、上記の問題関心の具体的内容に関わる議論や、思想史をめぐる方法論的議論と、内容的にも充実したものであった。

また、滞在中は、ライデン大学付属図書館・東アジア図書館で、問題関心に関連する文献、史料を調査・精読した。特に、ライデン大学図書館のオンラインデータベースには、海外の日本研究者の論文が多数掲載されており、非常に有益な論文に目を通すことができた。

5. 派遣の成果と今後の課題

空間的・時間的に限定的な日本という対象をいかに比較可能な形式で叙述し得るか、そしてその対象の個性をいかに知りうるか、という方法的問題に関してはライデン大学派遣前から積極的に取り組んできた。ポート教授との指導では、この問題は、「日本的」という形容詞との関連で議論された。

やや詳細を述べれば、比較という作業を通じて、炙り出された差異をいずれにか因果帰属して説明する場合、それら原因とその結果である差異を我々は「日本的」と形容することが可能なのか。可能だとするならば、その際、前提とされるのは、その「日本的」なる形容詞の意味内容の客観性である。この客観性は担保されることが可能なのか、その客観性は実証的な議論・検証に耐えうるか。また、果たしてその形容の意味内容に「日本的」と冠することは妥当なのか。という主旨であった。私にとって自明とされていた概念が、異なる視角からは議論の余地がある概念と考えられ、そのような概念の使用に関して自覚的に検討する必要があるということ、実際に海外の日本研究者との議論を通じて体感できたことは非常に有益であった。

修士論文では、更なる議論を展開したい。